

鬼謀

私説／黒田騒動

石沢英太郎

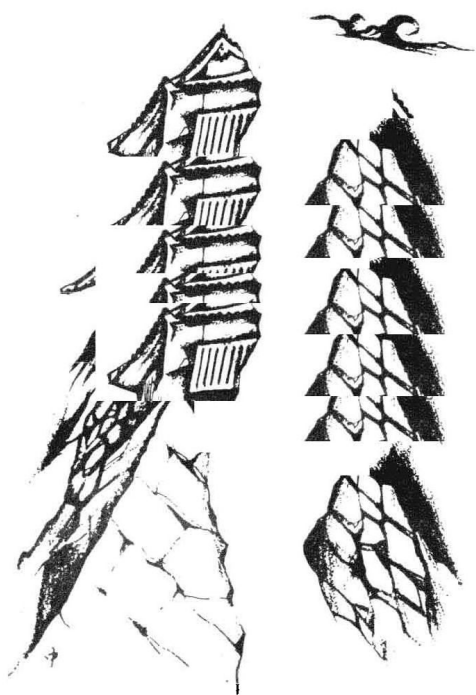


新人物往来

鬼謀

私説／黒田騷動

石沢英太郎



新人物往来社



検印省略

謀 鬼 一私説黒田騒動 ¥580

昭和45年3月15日 初版発行

著 者 © 石 沢 英 太 郎

発行者 菅 貞 人

発行所 株式 新人物往来社
会社

〒100 東京都千代田区丸の内3-3-1 新東京ビル
電話 (212) 3 9 3 1(代表) 振替 東京 151643

印刷／日本製版

製本／大和工業

0093—50009—3306

序

——石沢英太郎の歴史推理小説——

中 島 河 太 郎

長い年月の間に、私の携った各種の推理小説の選考から、多くの作家が誕生した。第一線に活躍している作家で、応募原稿のときから接している人もかなりある。受賞の榮譽を得ても、その後伸び悩む人もあれば、見違えるほど成長する作家もある。資質にもよるし、時の運にもよるだろうが、思う存分に羽搏いているのを見ることは、選考者として楽しく、張り合いもある。

千里の馬を発見することが、選考委員に課せられた使命であるが、応募者の中では比較的すぐれていても、頭角を抜きん出て将来までの素晴らしい人となると、それほどあるわけではない。

だが石沢英太郎氏はその稀な一人であった。昭和四十一年、双葉推理賞の第一回受賞者となれたが、共に選考委員であった黒岩重吾、角田喜久雄、南条範夫氏の諸氏が口を揃えて、その確かな技術を推賞されたものである。受賞作『羊歯行』は、羊歯採集の際、事故にあつて亡くなつた友人の死に疑惑を抱いて、羊歯への愛情を植えつけた主人公が、その真相に肉薄する話だが、その筋立てや行文はともかく、羊歯についての行き届いた観察といったわりが、読者におのずと伝わるほどの迫力に溢れていた。

この作者は恐らく植物に関係した人かと思つたのだが、その後の発表作を読んで、石沢氏が一同ごとに新鮮なテーマを選び、素材を深く研究したあげくの成果だと判つた。

作家はある程度をすぎると、自分の作風によりかかつて、技巧で処理するようになり、マンネリズムに染まりがちだが、氏は最近作の『キタキ絶滅』まで、次ぎ次ぎに斬新な領域に踏みこんで、ほとんど成功を収めている。

中でも推理小説界で注目されたものに、『秘画』と『謀鬼』（発表時の題名は、『権謀——私説栗山大膳記——』）とがある。前者は平戸に秘蔵されている秘画屏風に端を発し、東洲斎写楽の謎に挑んだ野心作である。

私も数年前、平戸を訪れたとき、北馬の屏風画に接した。切支丹や外国貿易により、かつては歴史に彩られた島の要地も、今ではひっそりした漁港にすぎなかった。恵まれた風光はあざやかな印象を残したが、異国の香りをかすかに伝えている町で、等身大の秘画を見せられた取り合わせに興味を覚えた。

石沢氏はその由来から進んで、浮世絵界の最大の謎である写楽の正体を解き、さらに収集家研究家の葛藤軌轢に鋭いメスを加えておられる。写楽についてはおびただしい論考が発表され、最近でも榎本雄斎氏の『写楽——まぼろしの天才——』のような好著が現われているが、まだ長年の謎に断案が下されたわけではない。石沢氏の作品中で説かれた初代豊国説も傾聴すべきものがある。その是非はともかく、前代の謎と現代の謎とが、浮世絵を媒介として緊密に係わり、絵の魔力にとり憑かれた人々の愛執を見事に捉えている。

『謀鬼』はまた氏の在住地にゆかりの深い黒田騒動に取材している。石沢さんが写本『栗山大膳

『事跡集録』を入手して、私の手許に届けられてから二年にもなる。少年時代に講談で黒田騒動を知り、鵜外の作品を読み、史学者の考察に触れた程度だから、喧嘩両成敗式の結末に釈然としなもののをもち続けていたものの、氏から送られた写本だけでは、皆目見当がつかなかった。

石沢さんは例によって、エネルギッシュな調査の上に鋭い史眼を働かされたらしい。いよいよ作品化された『謀鬼』を拝見して、私の長年の疑問は終止符をうたれた。しかも騒動の真相に迫っただけでなく、現代の権謀術数の正体も抜かりなく説明しておられる。

それぞれ二百枚に近いこの両中篇だけで、石沢氏の本領が窺えるとは思われないが、すくなくとも現代推理小説の単調を破るに足る意欲に溢れ、歴史と現代とを強い糸で結ぶことに成功した卓抜な収獲であった。

福岡県は毎年帰省のたびに通過するのだが、下車したことは数えるほどしかない。去年の秋は南九州の旅の帰途、石沢さんを頼りにして、久しぶりに博多駅におりた。『夢野久作全集』を編輯刊行中なので、未亡人に御挨拶し、生前の儘という故人の旧宅を訪うてみたかったのと、福岡在住の推理作家にお会いするためであった。

石沢さん夫妻の配慮は至れりつくせりであった。山村正夫氏もこの長旅にはじめから一緒だったし、新人物往来社から刊行された『謎の女王国』の執筆仲間だった。志賀島に車を走らせて、金印発見地の碑を仰げたのは嬉しかった。陽ざしの傾いた博多の海を前にしながら、三世紀の大陸と交渉のあった邪馬台国が、いろいろと空想された。

それはともかく、戦前の推理作家は愛好癖が嵩じて筆を執るようになった方がほとんどである。現在は作家への捷徑として推理小説を手がけようとする初心者がふえた。だから推理小説談

義に熱中する光景はみかけられなくなったが、石沢氏との話題は必ず推理小説に結びついてくるのだ。これほど新しい推理小説の開拓を、熱情をこめて語る人はいない。語るだけでなしに、一作ごとに真剣に対象にとりくんで、おろそかにしない態度は貴重な存在である。

夢野久作は生涯福岡を離れず、その土着性は中央文壇の輕薄に染まらず、没後三十余年を経て再評価を要請するほどのユニークな業績を樹立した。石沢氏もその同じ地に在って、デモニッシュな作家魂においては、相通ずるものがある。

私事がまじってしまったが、もっとも囑望している石沢氏の異色創作集が刊行されるというので、嬉しくて少々脱線したものと、許して戴きたい。

(昭和四五年二月一日)

目 次

序	—石沢英太郎の歴史推理小説—	中島河太郎	1
---	----------------	-------	---

謀 鬼 —私説黒田騒動

第一章	古記録	12
第二章	解 釈	33
第三章	事 件	53
第四章	謀 略	86
第五章	終 章	108

秘 画 —写楽の謎

第一章	プロローグ	129
第二章	秘画行	132

第三章	秘画をめぐって	152
	岡本青峰の場合	152
	百谷道雄の場合	162
	栗原美奈子の場合	166
第四章	浮世絵展にて	174
第五章	事件	199
	栗原晴夫のメモ	211
第六章	ある新事実——ある死	228
第七章	再び秘画	255
第八章	対決	265
第九章	エピローグ	272

表紙カット・イラスト 中村 宏

謀 鬼

——私説黒田騒動——

(日本の歴史・中央公論社版・十一巻 辻達也著より)

寛永九年（一六三二）のころ、筑前福岡の黒田藩で、藩主黒田忠之と家老栗山大膳との間に争いがおこり、大膳は幕府に、忠之が謀叛の意図ありと訴え出た。翌十年三月、將軍家光がじきじき裁いた結果、忠之の叛意は否認され、栗山大膳は南部に流された。これがいわゆる黒田騒動である。

たとい叛意は虚偽の申し立てであるにしても、藩主と家老との争いであり、しかも黒田忠之は短気者で、藩主としての能力に欠けていたとの評もあるほどだったので、取りつぶそうと思えばじゅうぶんその理由はあったはずである。

一説によると、家光が忠之を訊問し、栗山大膳と対決させようとしたとき、忠之はこれを拒否し「事の真否はしばらくおき、主君である自分が家臣と対決するのは君臣の道にはずれるから、もしどうしても対決せよといわれるなら自分に切腹を仰せつけてほしい」といったので、家光がこれに感服したのだという。

また一説には、家光が忠之を評して「かれは愚か者である。愚か者の所領を没収するのはかわいそうだから許してやる」と諸大名に申し渡したともいう。

將軍の命じた対決を拒否したのだからこれをとがめることもできるし、愚か者だから所領を没収するという理由も成り立つから、この両説ともわれわれをじゅうぶん納得させるものではない。

要するに黒田騒動判決の真相はわからない。

第一章 古記録

1

福岡県衛生研究所員、厚木宏は、有名な筑前黒田藩の黒田騒動の中心人物、栗山大膳に興味をもっていた。しかし、少し詳しく調べたいと思ったのは、ここ一、二年のことである。

厚木は、文学好きというのか、小説類はよく読み、同人誌に二、三の創作を発表したことはあるが、歴史はそう好きだといった方ではない。厚木が、他人と違った意味で、栗山大膳を意識するのは理由がある。

厚木の出自は、福岡県の朝倉郡である。この志波村は、昔、左右良さでらと呼ばれ、栗山家の知行地であった。だから、まず、厚木の家は地縁的に栗山家と結ばれている。が、それだけではなかった。

厚木は、幼いときから、厚木家は栗山家の血筋を引いていると聞かされていた。これはながい間、密かに口づてでいい伝えられた厚木家のいわば秘密事項であつたらしい。

いまから三百三十年ばかり前、黒田騒動うらぎの科がにより、栗山大膳は、逆臣として、東北地方に流されている。

その事件のあと、黒田藩は、栗山の姓を名乗ることすら禁じるという厳しい態度でのぞんでいる。厚木家は、栗山家の血縁として、そのころ位録から外されて、農村に土着したのではないかと思われる。逆臣の親族として、厚木家に対する世間の眼は冷たかったと想像される。これが、家系の秘密として、三百年の間、細々と口伝によって伝えられた理由だろう。

時勢の変わった現在、逆臣の血縁などで世間をはばかりるのはナンセンスだが、やはり、厚木家では、明治維新後も、家庭内だけの話として語られていた。

厚木が祖父からその話をきいたときも、さも秘密を話すのだという祖父の様子を見て、たいしたことでもないのに、どうしてもそんなに勿体ぶって話すのだろうと、おかしさを感じたくらいである。

もちろん家系図といったようなものも伝わっていない。厚木宏にとって、三百年前の祖先の話は、あまりに遠く離れ過ぎた出来事であった。

まして厚木のいまの仕事は、食品衛生検査という、化学分野である。いまの時代は、自分の仕事に関係のないものには、無関心にならざるを得ない仕組みになっている。要するに皆、忙し過ぎるのだ。

ただ、栗山大膳という存在が、厚木の心の中に深く沈んではいた。

いつか、デパートでやっている古書即売のとき、『騒動実記 全』という古本が眼に止まり、即座に買った覚えがある。このときも、その騒動実記の中に、伊達・秋田・越後に混じって黒田騒動の件りがあったからだ。

三田村鳶校訂の昭和三年発行の博文館版のもだった。江戸時代の実録体小説の中から、騒

動ものだけを選んだ本である。

黒田騒動は『寛永箱崎文庫』という題で載っている。

一読したがおもしろかった。忠臣あり、妖僧あり、美女あり、まさに波らん万丈の物語である。栗山大膳は、ここではたいへんな英雄として登場している。嘘かほんとうか知らないが叙述も詳しい。おもしろさは滅法だが、布置結構があまりにも講談調で、厚木は興趣を失った。

ちょうど前進座の『黒田騒動』の芝居がかかり、それも観にいったことがある。

よく出来た芝居だったが、これも栗山大膳を忠臣として描いている。悪玉善玉がはっきりし過ぎてゐる。だから、中心人物の栗山大膳が生きた人間として、こちらの胸に迫ってこない憾みがあった。

だが、『実録本』にしろ、演劇にしろ、厚木宏は一般の読者、あるいは観客として見ていたに過ぎない。『祖先は遠くなりけり』の感があった。また、そういった事柄にさして興味が持てなかったのは、厚木の三十歳という年齢の若さにもあったのかもしれない。仕事に脂が乗っている盛りでもあった。過去をふりかえったり、歴史を探るには、現実の仕事が忙し過ぎた。

一年ばかり前のことだった。

県の県史編さん室の木下主事と雑談していたときに、厚木はふと口をすべらした。

「ぼくの祖先は栗山家だったらいいんですよ。例の栗山大膳……」

「ほう」

木下主事は関心を示した。「珍しいですね。栗山家の末裔とは……」

「いや、家系図もなにもありませんし、ほんとうかどうかは分かりませんがね」